

## 心理臨床家の専門性発達に関する基礎的研究

### —大学院教育における臨床訓練に焦点を当てて—

Basic research on the professional development of a clinical psychologist

—Focusing on education and training in a graduate school—

児玉 成未<sup>1</sup>, 西河 正行<sup>2</sup>, 古田 雅明<sup>2</sup>, 齊藤 圭<sup>1</sup>, 中村 純子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻, <sup>2</sup>大妻女子大学人間関係学部

Narumi Kodama<sup>1</sup>, Masayuki Nishikawa<sup>2</sup>, Masaaki Furuta<sup>2</sup>, Kei Saito<sup>1</sup>, and Jyunko Nakamura<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Studies in Clinical Psychology, Graduate School of Studies in Human Culture, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama-shi, Tokyo, Japan 206-8540

<sup>2</sup>Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama-shi, Tokyo, Japan 206-8540

キーワード：臨床心理士，専門性発達，大学院教育，心理臨床訓練，初心者カウンセラー

Key words : Clinical psychologist, Professional development, Graduate education, Clinical training, Novice counselors

#### 抄録

近年、人の心に関わる臨床心理士は医療・福祉・教育・司法・産業など様々な現場において幅広く活躍している。本研究では臨床心理士訓練途中である大学院生と大学院を修了して数年の臨床経験を経たカウンセラーを対象とし、カウンセリング場面における初心者カウンセラーの特徴を抽出し、それらがどのように作用しているのかを検討した。そして大学院を修了したカウンセラーの特徴を抽出し、初心者カウンセラーとの違いを探索的に検討し、それらの違いを明らかにすることで、臨床心理士養成教育へ提言することを目的とした。その結果、大学院生はクライアントの問題を十分に理解していない、うまく対応できていないと感じていた。また、「自分がカウンセラーとして技量を試されているようなプレッシャー」「中断の恐怖」を感じていた。そして、「今後カウンセラーとして働いていく上で適性が脅かされる不安」が明らかとなり、クライアント、指導教員の期待に答えていない葛藤の背景に、より根本的な適性不安があることが示唆された。しかし、大学院を修了したカウンセラーには大学院生に見られたような特徴は見られなかった。これらのことから、大学院生には「誰に何を期待され、自分自身は何を期待しているのかを考えさせる機会を持たせる」などの「型」への固執を引き起こす要因への配慮なり対策が講じられなければ根本的な解決にはならないことが示唆された。

#### 1. 問題・目的

わが国において、臨床心理士として現場で活躍していくためには、臨床心理士養成指定大学院修士課程2年間を修了することが必須となる。スーパービジョンやケースカンファレンスなどの訓練・教育課程を通して、心理臨床の専門的知識や技術を獲得するだけでなく、人の心を扱う専門家である以上、自己自身を見つめ、自らの感情や問題と向き合うことも重要である(Corey& Corey, 1998<sup>[1]</sup>)。しかし、訓練生から心理療法の専門家に

なっていく変容過程は複雑で困惑するような問題に直面せざるを得ない(Zaro, Barach, Nedelman& Dreiblat, 1987<sup>[2]</sup>)。そのため、訓練生から専門家になっていく変容過程において、専門的訓練を受けると共に、それぞれの学生がどのような内的な体験を行うのが重要だと考える。

金沢(1998)<sup>[3]</sup>が紹介しているSkovholt& Rønnestad(1995)のカウンセラーの8段階の発達段階とStoltenberg& Delworth(1987)のカウンセラーの発達段階と各発達段階に応じたスーパービジョンの方法

について論じた統合的発達モデル(IDM)では、初心者の段階では不安が高く、スキル習得に関心が強く、自己および他者への気づきに欠け、スーパーバイザーに依存的である。この段階を経て、臨床経験を積んで、徐々に自分自身のやり方を模索していき、柔軟に対応できる段階へと成長していくものと考えられる。またこれらの段階に応じたスーパービジョンは、初心者にしては、構成的で体系化された訓練プログラムによって、訓練生が模倣しやすいような明確なモデルの提示が必要であるが、段階が進むにつれて、今まで学んだことや経験を統合させ発展させて、その時々の変化する状況に柔軟に対応できるように、型にとらわれない非構成的な訓練が望ましいとしている。

しかし先行研究より次のような指摘がされている。元々カウンセリングに対して自信がなく、失敗の恐れを持っている初心者カウンセラーは今まで学んできた理想的なカウンセリング像を求め、それを実行するが現実のカウンセリングではその通りにはいかず、理想と現実のギャップに苦しむ。しかし、この理想通りにいかない現実や内面で起こっている葛藤をスーパーバイザーやケースカンファレンスでの評価や指摘の恐れから、打ち明けず、さらに理想的な「型」に固執していくという悪循環になっている可能性が考えられる。つまり、初心者カウンセラーとクライアントとの関係、初心者カウンセラーと指導教員との関係の双方がカウンセリング場面へと影響しているものと考えられる。これらの過程を理解するために、南隆男・浦光博・角山剛・武田圭太(1993)<sup>[4]</sup>の対人的影響づけの過程を参考にできると考えられる。そこで、南ら(1993)の対人的影響づけの過程に基づいた大学院生とクライアントの役割モデルを以下の図1に、指導教員と大学院生の役割モデルを図2に示し、先行研究の結果を対応づけた。

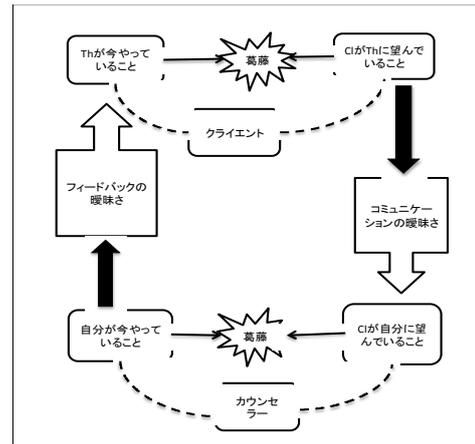


図1 大学院生とクライアントの役割モデル

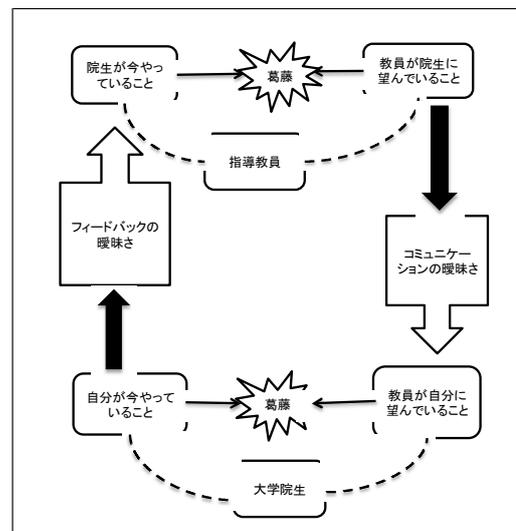


図2 大学院生と指導教員の役割モデル

これまで、初心者カウンセラーの特徴や問題はそれぞれの先行研究において個々に指摘されているが、カウンセリング場面において初心者カウンセラーのこれら全ての特徴がどのように現れているか検討した研究は見られてない。また、カウンセラーの発達において、初心者と数年の臨床経験を経たその次の段階では質的な差異が大きくあるものとされており、まずはこの2つの段階の特徴の質的な差異を明らかにすることが、臨床心理士養成教育を考える上でも役立ちうるであろうと考えた。そのため、本研究では訓練途中である大学院生と大学院を修了して数年の臨床経験を経たカウンセラーを対象とし、カウンセリング場面における初心者カウンセラーの特徴を抽出し、それらがどのように作用しているのかを検討する。そして大学院を修了したカウンセラーの特徴を抽出し、初心者カウンセラーとの違いを探索的に検討し、それらの違いを明らかにすることで、臨床心理士養成教育へ提言することを目的とした。

## 2. 方法

[調査対象者]A 大学院臨床心理学専攻に在籍する学生5名, A 大学院修了後10年未満のカウンセラー4名の計9名であった。

[調査時期]2013年8月～11月であった。

[調査方法]1対1の半構造化面接を行った。インタビュー調査に先立ち、調査対象者に面接場面で何を意識し、どのような考えがあってその発言・行動に至ったのかなどのコメントを付記してもらったケース記録を元に、本研究の指導教員でもある臨床経験豊富な臨床心理士と筆者が対象者それぞれに対象者の発言意図に至った背景をより明確にすることを目的に質問内容を検討した。ケース記録の提出にあたり、クライアントの個人情報を守り、分析終了後に粉碎処分することを約束して承諾を得た。

[分析方法]対象者から得られた回答をより厳密に抽出するために抽象度をあげない葛西(2008)<sup>[5]</sup>の逐語録の内容をラベルとして要約することによって構造化し、KJ法に準じて大学院生と大学院を修了したカウンセラーの特徴をそれぞれ分類した。

## 3. 結果・考察

大学院生は6つの特徴が抽出され、以下の問題を意識していた。まず、「想像していたものと違う、クライアントの話の分からなさ」「自分自身がクライアントについて何を考え、何を感じたからこの発言に至ったという発言意図が不明確であること」である。つまり、大学院生はクライアントの問題を十分に理解していない、うまく対応できていないと感じていた。また、「自分がカウンセラーとして技量を試されているようなプレッシャー」「中断の恐怖」を感じていた。また、その背景に、「救世主願望を持っている」ことが明らかとなった。

指導教員と大学院生との間で生じる、大学院生カウンセラーの側に生じる葛藤は次のようなものであった。大学院生のカウンセラーには指導教員が自分に望んでいることと今自分がやっていることの間で葛藤がある。この点については、先行研究では、「ケースカンファレンスにおいて失敗が大勢の前でさらされる」(岩壁, 2007<sup>[6]</sup>)、「スーパーバイザーからの評価不安や目上への配慮」(福島ら, 2010<sup>[7]</sup>)、「スーパーバイザーや同僚たちに無能だと思われる恐怖」, 「カウンセリング場面で自分がしていることに関して恐れや不満を持ってい

て」(Zaro et al., 1987)のように、指導教員の期待には応えていないという葛藤があり、その背景に「ケースカンファレンスにおいて失敗が大勢の前でさらされると、それは学習体験にならず、一種の「トラウマ」や「傷つき」体験になりやすい」「このような状況を目の当たりにした他の学生も、自分の失敗や本当に困っていることを正直に話して教員にフィードバックを得ることよりも自分の間違いをつつかれないように防衛的な発表になってしまう」(岩壁, 2007)こと、「クライアントを失う恐怖」(Zaro et al., 1987)が指摘された。また、「事前指導や学んだことに従わなければならないという意識」のように、指導教員が自分に望んでいることを強く意識していた。一方、「カンファレンスなどでの指摘の恐怖」があり、指導教員の期待に応えられない葛藤も自覚していた。その結果、「想像していたものと違う、クライアントの話の分からなさをスーパーバイザーなどに従うことで安心し、依存的・模倣的になっている」と考えられた。なお、「今後カウンセラーとして働いていく上で適性が脅かされる不安」が明らかとなり、クライアント、指導教員の期待に応えていない葛藤の背景に、より根本的な適性不安があることが示唆された。

また、大学院を修了したカウンセラーは8つの特徴が抽出され、大学院を修了したカウンセラーは大学院生に見られたような「事前指導や学んだことに従わなければならない」「スーパーバイザーやカンファレンスでの指摘の恐怖」といったことは意識しておらず、「クライアントの理解」が前提にあるため、自分自身がクライアントに対して考えたことや感じたことに基づいて質問事項を考えて発言し、今後の方針や次回へどう繋げるかといったことを考えていた。そのため、発言意図が明確であった。このことから、大学院を修了したカウンセラーはスーパーバイザーからある程度自立し、自分自身でケース理解を進めていこうという姿勢があるものと考えられる。また、大学院を修了したカウンセラーはカウンセリング場面で生じているクライアントとカウンセラー関係からクライアントの問題や特徴を理解し、自己の問題へも客観視していることが示唆された。カウンセリング場面でクライアントとカウンセラー関係のから起こっていることを客観視し、そこからクライアント理解へと繋げているために、大学院生に見られたようなカウンセリング場面での混乱は見

られなかったのであろう。

これらのことから、先行研究では、「初心者に対しては、構成的で体系化された訓練プログラムによって、訓練生が模倣しやすいような明確なモデルの提示が必要である」と指摘されていたが本研究の結果を考えると、明確なモデルの提示は必要だとしても、それは単に「型」への固執をもたらすだけにしかならないように思われる。むしろ、「型」への固執を引き起こす要因への配慮なり対策が講じられなければ根本的な解決にはならないと思われる。例えば、「誰に何を期待され、自分自身は何を期待しているのかを考えさせる機会を持たせる」などが挙げられるであろう。カウンセリングを始める前にこういった考えを意識化させ、他者と共有し合うことは自己理解にも繋がるであろう。そして、そういった考えあらかじめ知っていれば、カウンセリングを進めていく上で、クライアントとの関係性を考えるときに客観的に見やすくなるのではないかと考えられる。

#### 4. 今後の課題

今後の展望として、本研究では大学院生と大学院を修了したカウンセラーの特徴の差異が明らかになったが、今後は初心者の段階から次の段階へとステップアップしていく過程で、変化の要因となっているものを明らかにすることが必要であろう。そのためには、調査対象者のサンプル数を増やし、大学院生から長期に渡った横断的な調査をすることでカウンセラー個別の成長過程を検討し、成長過程における変化要因を探ることが重要であろう。そしてその要因を解明することがより臨床心理士養成教育へ生かすことにつながるものと考えられる。

#### 謝辞

本論文の作成にあたり、お忙しい中快く面接調査にご協力してくださいました9名の皆様には深く御礼申し上げます。

#### 付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」(K027)の助成を受けたものである。

#### 引用文献

- [1]Corey, M. S. et al. *Becoming a helper*. 3<sup>rd</sup> Ed. Brooks Cole Publishing Company. 1998. (コーリィ, M. S. ほか, 下山晴彦ほか訳. 心理援助の専門職になるために—臨床心理士・カウンセラー・PSWを目指す人の基本テキスト—. 金剛出版, 2004.)
- [2]Zaro, J. S. et al. *A Guide for Beginning Psychotherapists*. Cambridge University Press. 1977. (ザロ, J. S. ほか, 森野礼一ほか訳. 心理療法入門—初心者のためのガイド—. 誠信書房, 1987.)
- [3]金沢吉展. *カウンセラー—専門家としての条件*—. 城信書房, 1998.
- [4]南隆男ほか. *組織・職務と人間関係—効率と人間尊重の調和*—. ぎょうせい, 1993, pp129-165.
- [5]葛西俊治. *関連性評定質的分析による逐語録研究—その基本的な考え方と分析の実際*—. 札幌学院大学人文学会紀要. 2008, 83, 61-100.
- [6]岩壁茂. *心理療法・失敗例の臨床研究—その予防と治療関係の立て直し方*—. 金剛出版. 2007.
- [7]福島真一ほか. *スーパーヴィジョンにおける「言わなかった体験」に関する調査(1)—内容と理由に関する質的分析*—. 第31回心理臨床学会発表論文集. 2010, 345.

---

## Abstract

---

In recent years, clinical psychologists involved in the mind of the people he has worked extensively in the field and various other medical care, welfare, education, justice and industry.

I intended for the graduate student that clinical psychologist training was on the way and the counselor who I completed a graduate school, and passed through the clinical experience for several years in this study and extracted the characteristic of the beginner counselor in the counseling scene and examined it how they acted. And I extracted the characteristic of the counselor who completed a graduate school and examined a difference with the counselor beginner for searching and was intended that I proposed it to clinical psychologist training education by clarifying those differences.

As a result, the graduate student does not understand the problem of the client enough; felt that could not cope well. In addition, they felt "ability is tried as a counselor "and "fear of the interruption". And "the uneasiness that fitness was threatened in working as a counselor in future" became clear, and it was suggested that there was the fitness uneasiness basic in the background of the tangle that did not affect a client, the expectation of the counselor .However, the characteristic seen in a graduate student was not seen in the counselor who completed a graduate school. If the consideration to a factor to cause the persistence to "a model" "to give a graduate student an opportunity to let you think about what was expected, and what oneself expected of whom" or measures were not taken, from these, the basic thing that was not solved was suggested.

---

(受付日 : 2014 年 6 月 22 日, 受理日 : 2014 年 7 月 1 日)

児玉 成未 (こだま なるみ)

現職 : 社会福祉法人ロザリオの聖母会 海上寮療養所 心理職

大妻女子大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻修士課程修了.